

D O G

その犬は金茶色で、目は黒だった。

犬は自分をごく平均的な犬だと思っていたし、幸せだとも思っていた。

毎日の食事にはありつけるし、雨風もしのげる。

たまに飼い主にぶたれることもあったが、  
そんなことはどこでもあることだと思っていた。



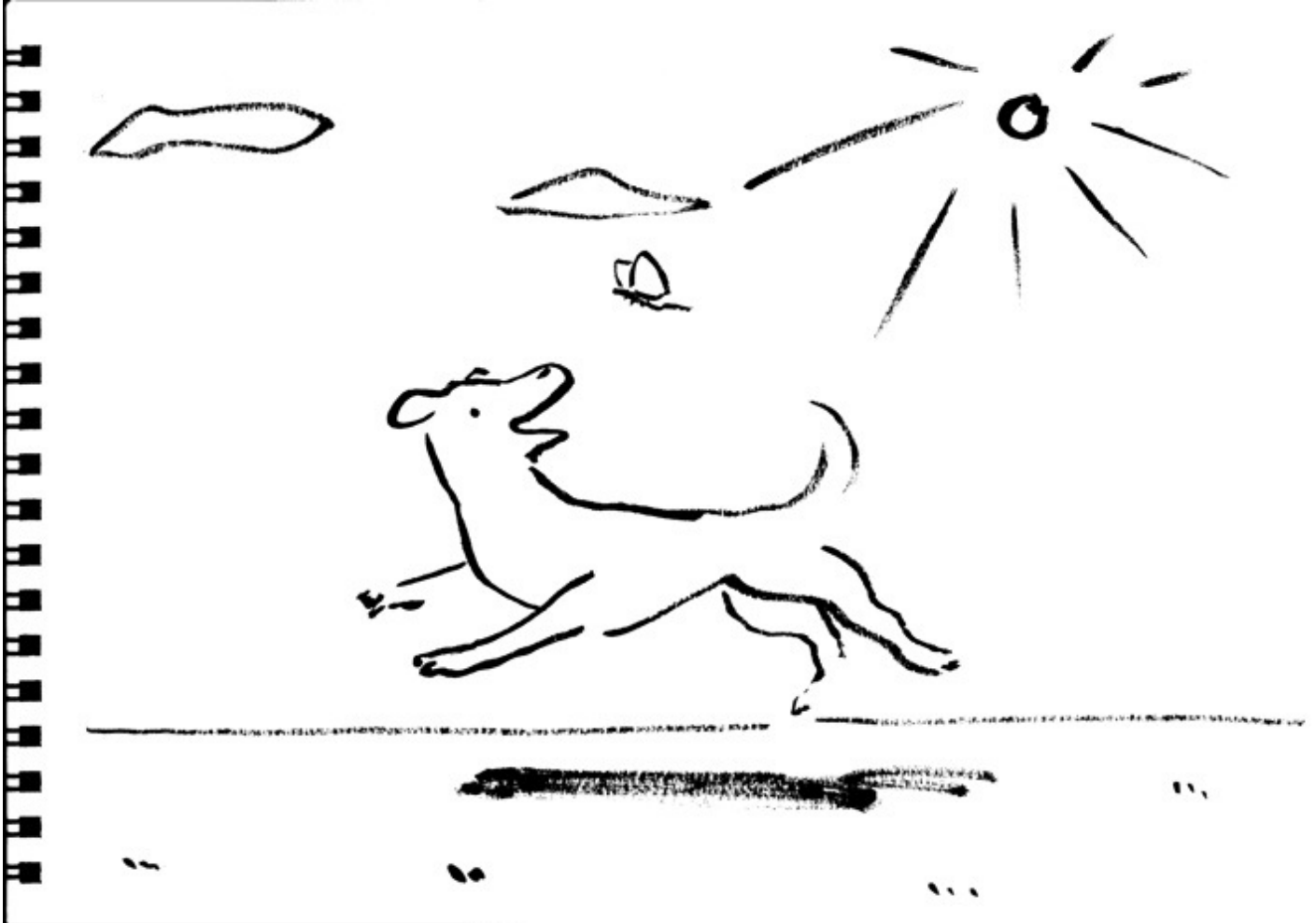
ある晴れた日。

犬は乗用車に乗せられて、  
とても広い土地の真ん中に連れて行かれました。

『なんて気持ちがいいんだろう。

吹く風も町のものとは全然違うし、  
走っても走っても、ぶつかるものは何もない！』

自分が捨てられたのだと気付いたのは、  
太陽が山の陰にその身を落とし始めた頃でした。

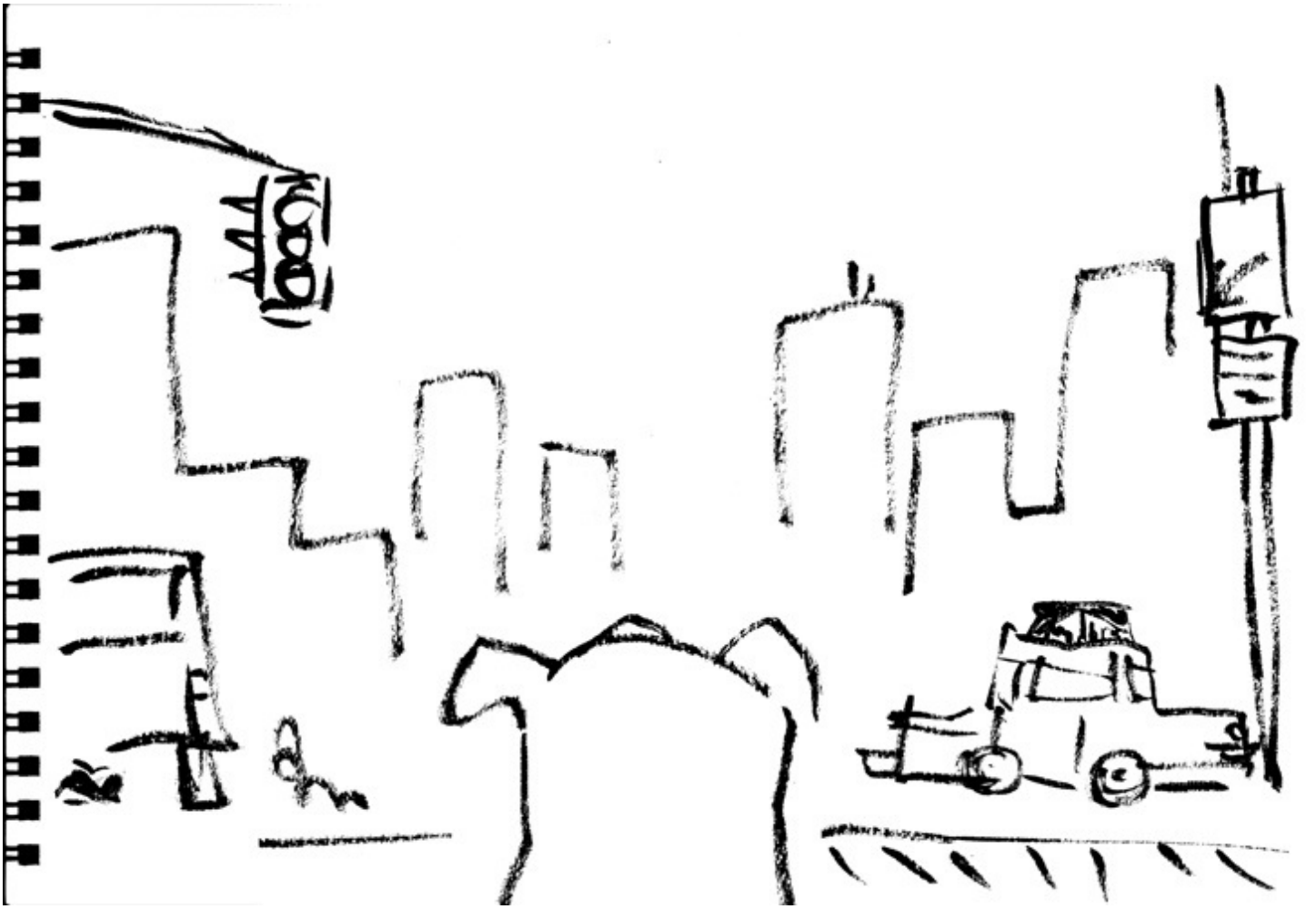


『ぼくは何も悪いことはしていないのに……  
いったいどうしてこんなことになったんだろう』  
夜になると寒さは増し、風は容赦なく吹きつけます。

『自分は世界一不幸な犬だ』  
そう思いながら、怒ったり、悲しくなったり、  
皮肉っぽく笑ったりしながら、  
犬はあてもなく、ただ歩き続けた。



歩いて、歩いて、歩き続けると、初めて見る街にたどり着いた。  
人も、車も、建物も、犬がもといた町よりずっと多い。  
とても騒がしくて、素敵な街とは思わなかったが、  
ここならなんとか食事を見つけそうだった。



犬がごみバケツをあさっていると、

目の前に毛の長い犬が現れた。

『やあ、青年。見ない顔だな？ おまえ、のら犬なの？』  
そこで犬は今までのいきさつを、毛の長い犬に話しました。

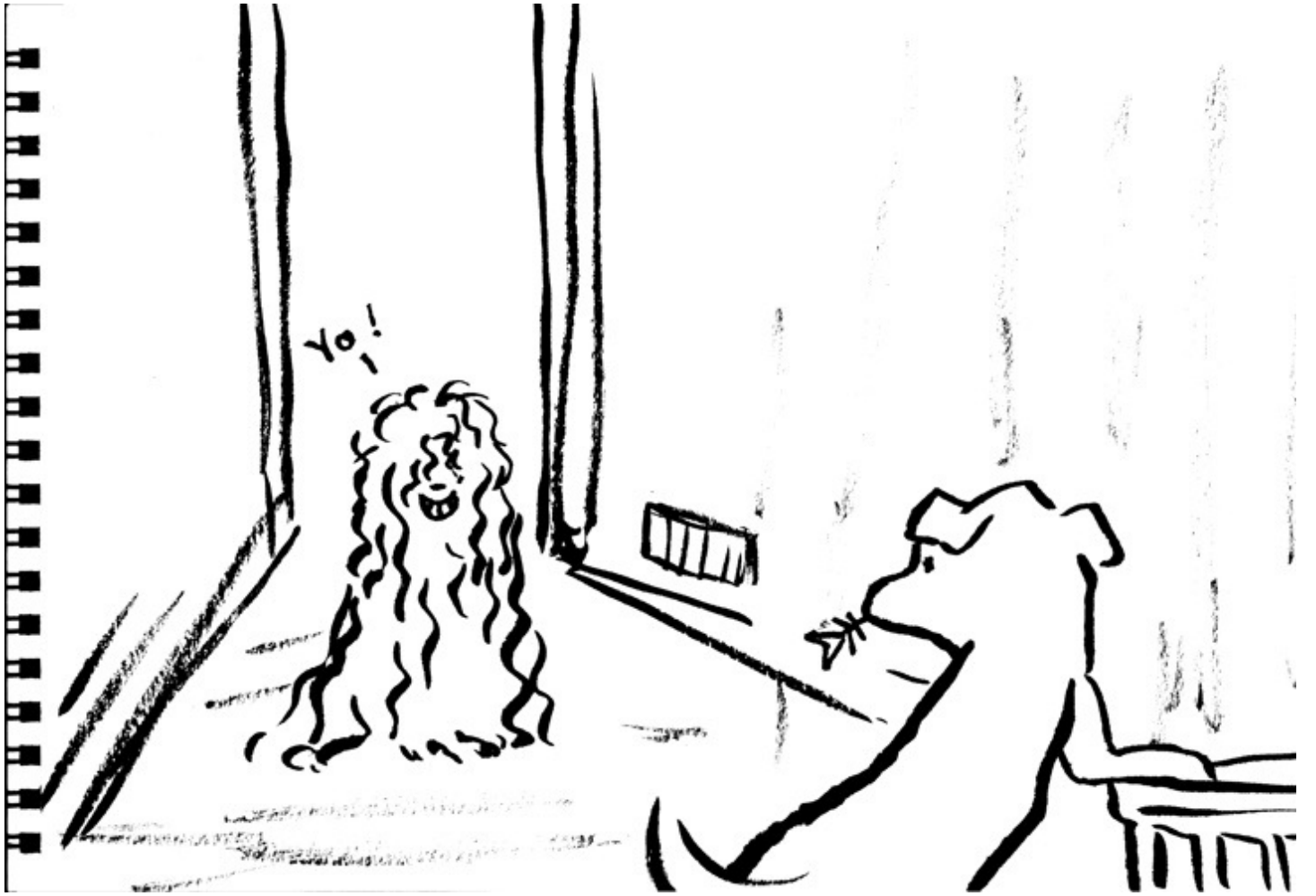
『へえ？ そいつは不幸なんかじゃないぜ？

おまえさん、自由になったんだ。

それこそが全ての犬が求め、与えられないものだ。

どうだい、俺と一緒に来るか？』

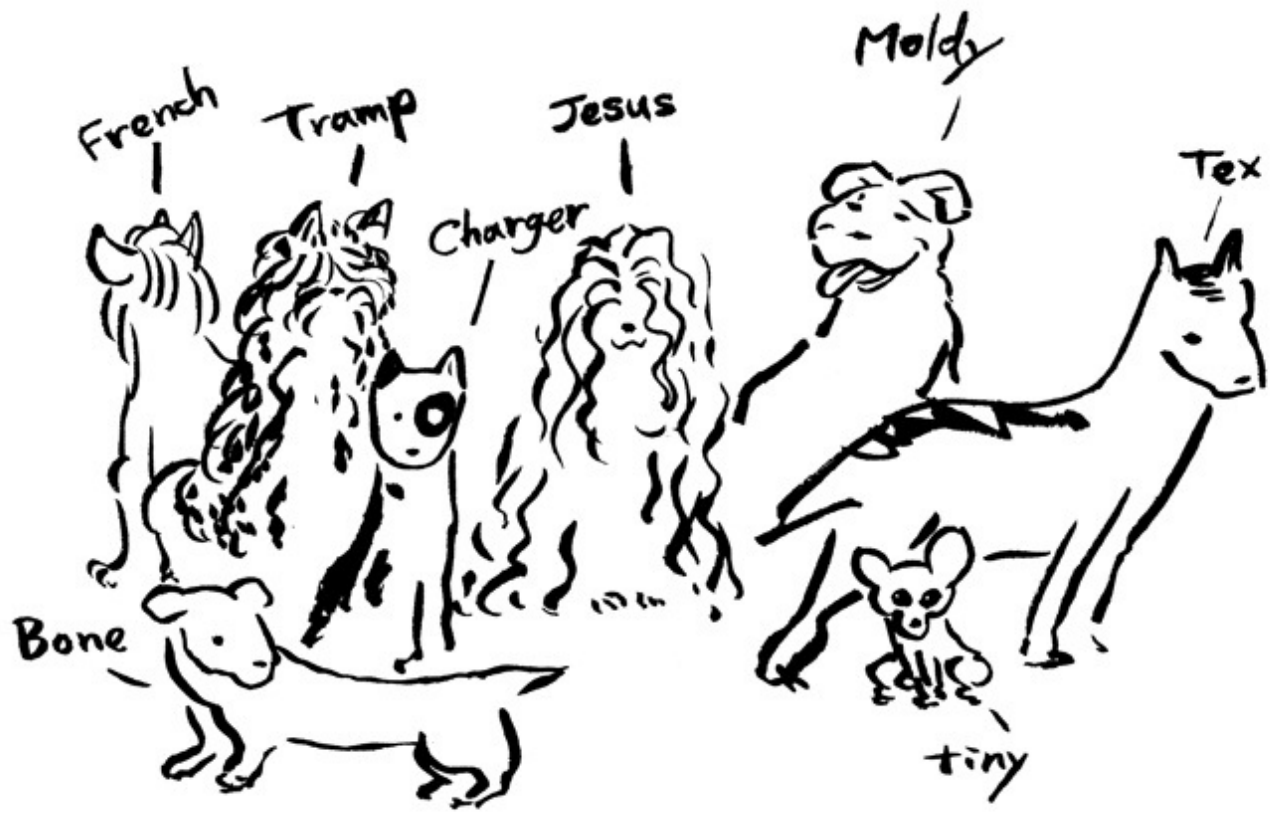




彼はたくさんの仲間に紹介してくれました。

ボーン、トランプ、タイニー、フレンチ、  
モールドィ、チャージャー、テックス。

毛の長い犬はジーザスと呼ばれていて、  
彼は犬に“フラワー”という名前をくれました。  
犬は、おかしい名だなと思ったけど、黙っていた。

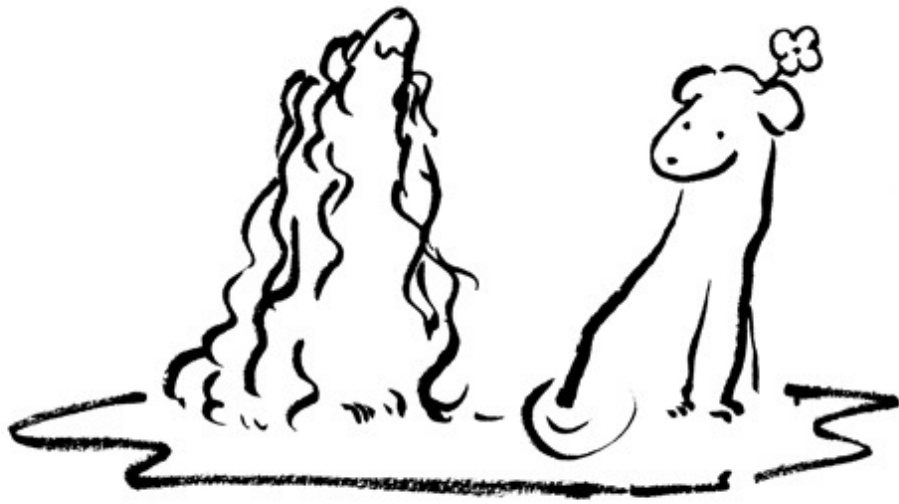


フラワーになった犬は、仲間と一緒に残飯をあさったり、  
時には盗んだりして、どうにかうまくやっていました。  
ジーザスは『これこそが犬の生活なのだ』と、よくいいました。  
フラワーも、そうかもしれないと思い始めていました。



Wonderful!!

Wow...



フラワーが仲間のところへ戻ると、  
テックスがうなり声を上げて飛びかかってきます。

『今日、おまえがあさったのは俺の縄張りだ。  
今度あそこでメシを食ってみろ。ただじゃおかないからな』  
フラワーはひどくショックを受けました。



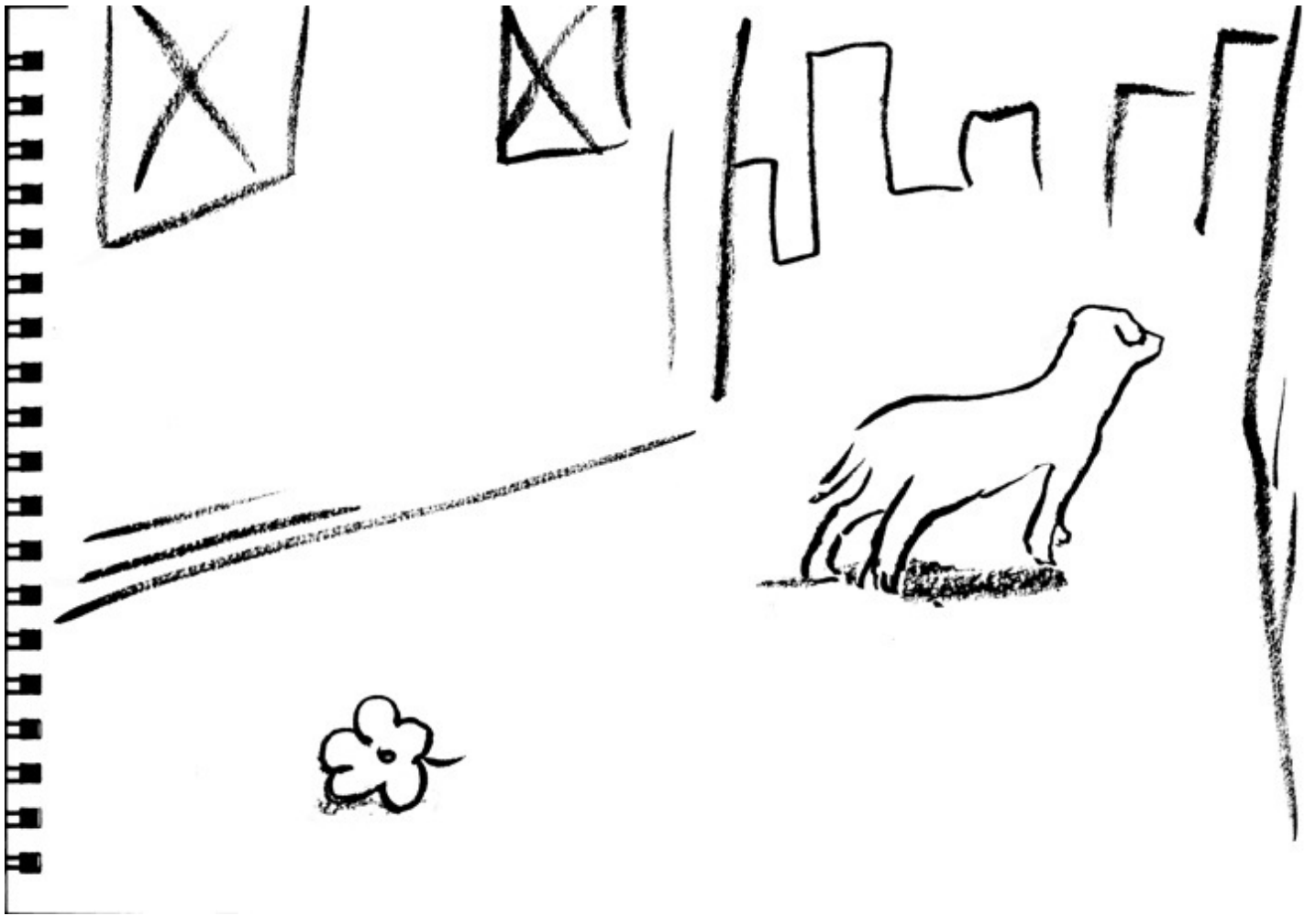
『これが自由ってものなんだろうか……？』

答えの出ないまま、フラワーはフラワーであることをやめ、

群れを去ることを決めました。

それを止めるものは、誰ひとりいませんでした。





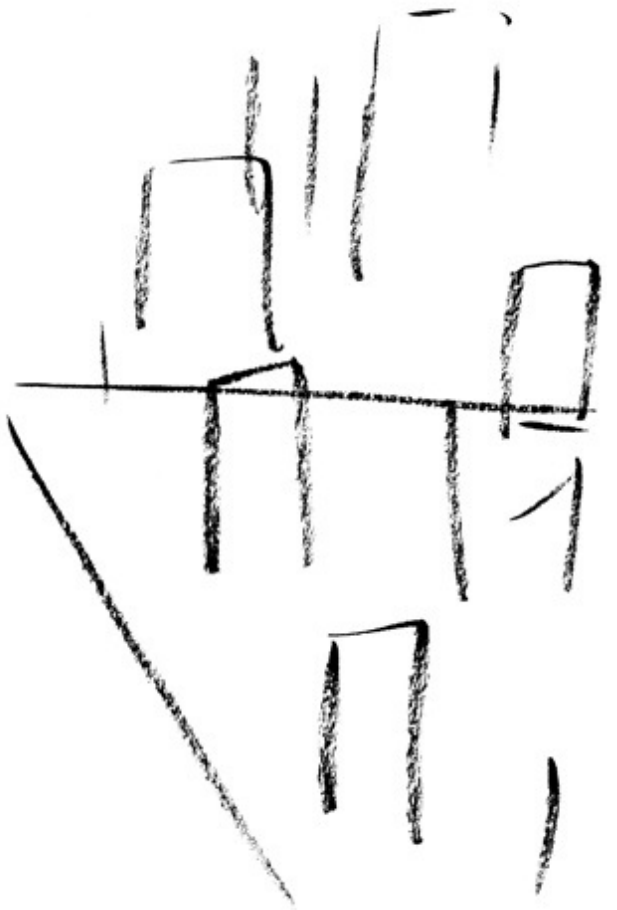
犬はまたひとりになり、長い道のりを歩きました。

冷たくなった足先は割れ、

アスファルトの地面に赤い跡を残していきます。

何もかもが自分に対して意地悪のように、

犬は感じていました。



気がつくと、犬は山の中に入り込んでいました。

聞こえるのは川のせせらぎと風の音。

ときおり鳥があげるカン高い声とその羽音。

鼻孔に感じるのは森の深い緑と、他の獣の匂いだけ。

凜とした空気に身が引き締まる思いがします。

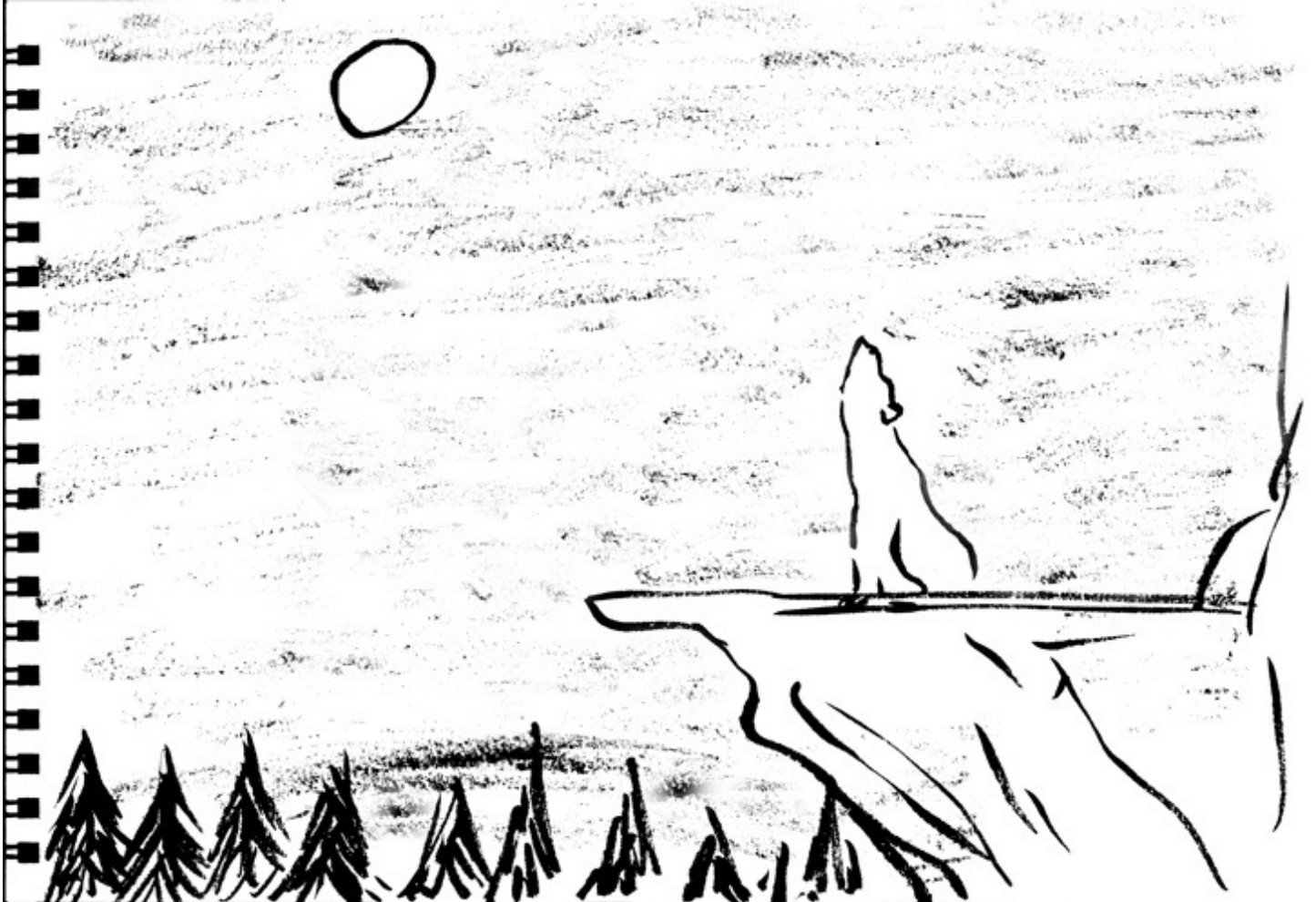


犬は本能のおもむくままに狩りをし、  
肉を食べ、川の水を飲んだ。

『これこそが犬の生来の生き方、本当の自由なんだ。』

自分はここで山犬になって、そして死のう』

そして月に向かって、ひとつ遠吠えをしました。



山鳥を仕留めての食事がすんだ、ある日のこと。  
犬の前に、一匹の年老いた黒い犬が姿を現しました。  
自分のほかにも犬がいたことに驚いて、  
『あなたも捨てられたのですか？』  
と犬は尋ねた。老犬は、自分は捨てられたのではなく  
家を出てきたのだと答えた。  
なぜなら自分は今すぐ死ぬからだ。



『どうしてそんなことを？』

死を前にして飼い主から

自由になりたかったのですか？』

老犬はやさしい茶色の瞳を犬に向けて答えた。

『私は今も、今までもずっと自由だった。

私が友の元にいたのは、そうしたかったからで、

家を出たのも同じ理由からだ』





老犬の話はジーザスのものとはまた違って、  
とても興味深いものだった。  
犬は狩りをしない老犬のために、  
獲物を捕っては差し出し、  
そしてたくさんのお話を聞かせてもらった。



何回目かの食事の後、老犬は  
『もし君にその気があるのなら、  
この山のちょうど反対側にある家を訪ねるといい』  
と言い、山の向こうを顎で指し示した。  
『そこなら君を暖かく迎えてくれるだろう』  
彼の提案に、犬は答えた。  
『ぼくは今のクールな生活が気に入っているし、  
もう誰とも群れを成さず、本来あるべき犬の生活をして  
ここで生涯を終えるつもりです』



『なるほど、もう決めたというなら仕方ない。  
だが、いつでも気が変わったら行って見たまえ。

さて、君の“クール”を邪魔するのも  
申し訳ないので、そろそろ行くでしょう』

そして、老犬は最後に犬にこう言った。

『その若さで、犬の生活の何たるかが判った、  
などと言うのは大変危険なことだ。

君はまだ可能性にあふれているのだから』

老犬は、尻尾を低くパサパサと振って、  
山の奥に入って行き、そして見えなくなった。



犬はもとの、狩りをし、  
ただ食べるだけの生活に戻った。

老犬と会う前よりも、  
もっとずっと自分が寂しさを感じていることに  
気が付かない振りをした。

そしてとうとう、  
すべてを覆い隠す雪が降り始めた。



取れる獲物も減り、  
寒さと飢えで犬はどんどん弱っていった。  
『今だけだ。この季節さえ乗り越えれば、  
後はなんてことはないんだ……』  
犬は自分がまだ、がんばれると信じていた。  
なぜなら、自分は前よりも強くなったのだから。  
吹雪のなかを、犬は歩いた。  
なぜ歩いているのかも分からずに、  
ただ、歩き続けた。



『彼の教えてくれた家に行くべきだったのかな……』

『ぼくはなんて頑固なんだ。本当に……』

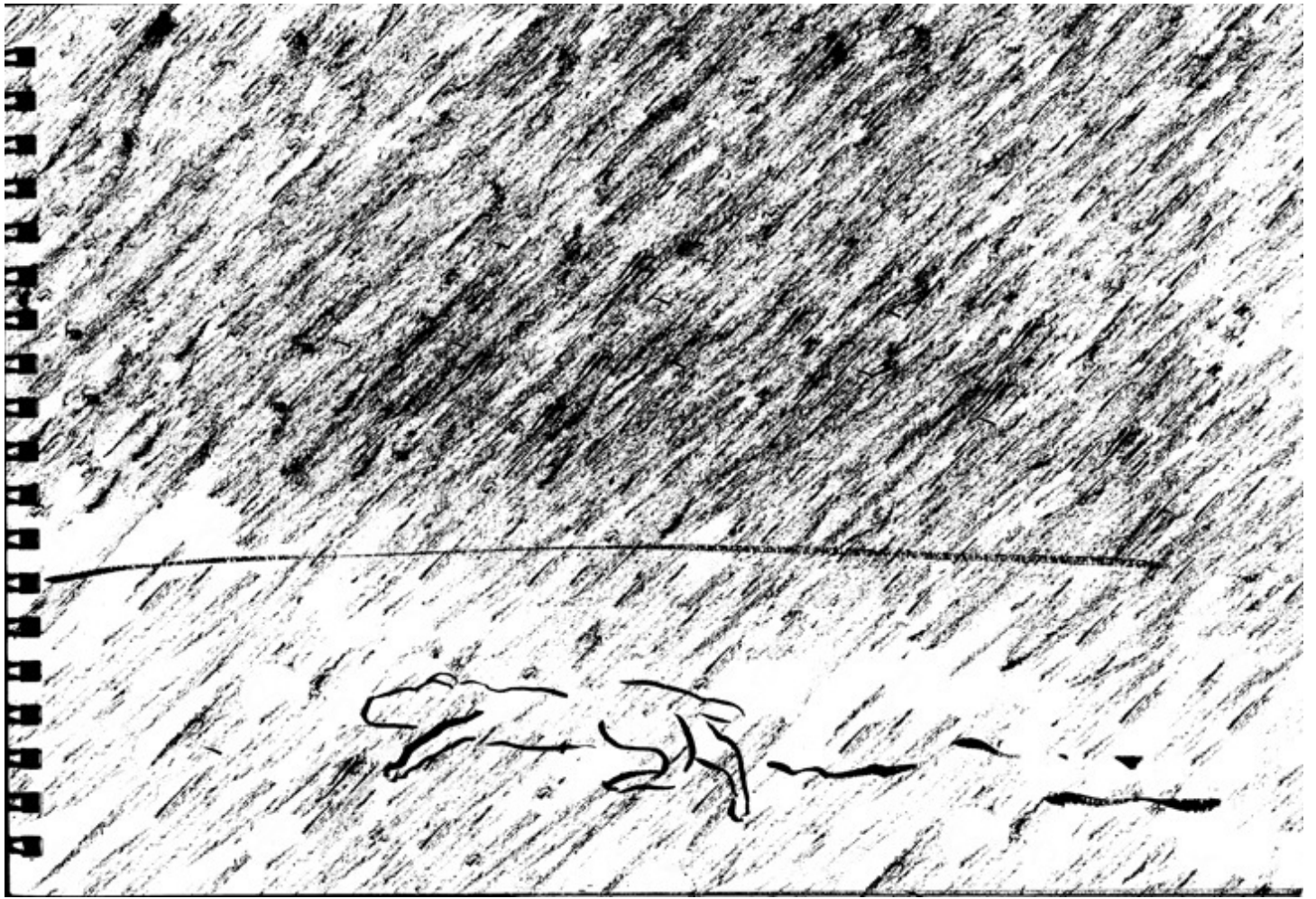
犬は自分が歩けなくなっていることを認め、歩くのを止めた。

『彼なら、何て言うだろう……』

“吹雪は吹雪のすべきことをしている”とでも……？』

犬はゆっくりと倒れ、そして静かに目を閉じた。





犬が次に目を開けると、  
そこは見たことのない家の中だった。  
大きな老人が、暖炉に薪をくべている。  
その足元にはあの老犬に良く似た、  
黒い犬が丸くなっていた。  
犬は助かったことを静かに感謝し、喜んだ。  
すべてに。



犬が感謝したことはまだあった。

老人の黒い犬はとても美しい犬で、あの老犬の孫娘だったこと。

そして彼女が自分のことを愛してくれたこと、

自分もまた、彼女のことを愛したこと。

犬は思った。

『これもまた犬のあるべき生活に違いない』と。

FAMILY

